

2022年1月30日

年間第4主日

菊地功大司教 メッセージ

神の望まれる世界が実現しないのは、一体どうしてなのでしょう。

ルカ福音は、ナザレの会堂でイエスが自らの使命を記したイザヤ書を朗読した後に、神の言葉がその日に実現したと告げた後のことを記しています。神の言葉に接した人々は、自分たちがよく知るヨセフの子が、このようなことを言うとは一体どういうことだと、つまづいたことを記します。

神の望まれる世界が実現しない一番の理由は、わたしたちが神の言葉を、そのまま素直に受け取ることができないことにあります。わたしたちは、受けた言葉を解釈します。往々にしてその解釈は、神の思いを推し量ろうとする識別ではなく、自分の経験と知識に基づいた判断による解釈です。神の言葉を、この世の価値観という枠にはめて解釈しようとする事によって、わたしたちはその実現を阻んでしまいます。

エレミヤ書は、預言者エレミヤの召命を物語っています。エレミヤが誕生する前から、彼を預言者と選ばれていた神は、「あなたは腰に帯を締め、立って、彼らに語れ」と命じます。しかも、「わたしが命じることをすべて」語るようにと、神は指示します。すなわち、エレミヤが語ろうとすることはエレミヤの解釈ではなく、エレミヤの知恵と知識に基づいた言葉ではなく、神が語ることを「すべて」そのまま告げるようにとの命令です。そこに人間の価値観の枠組みが介入する余地はありません。だからこそ、簡単には受け入れられないのです。拒絶されるのです。それに対して、「わたしがあなたと共にいて、救い出す」と神は約束されます。神の言葉に従い、それをこの世の価値観によってゆがめることなく伝えようとするものに、神は共にいてくださるという約束であります。

とはいうものの、ただ単に神の言葉を繰り返していればそれで良いわけではないと、パウロはコリントの教会への手紙に記します。すなわち、「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル」に

すぎないと、パウロは記します。

わたしたちは、愛の心を持って、神の言葉を語り伝えなくてはなりません。この世の価値観の枠ではなく、神の愛の価値観の枠を前面に掲げて、神の言葉を告げ知らせなくてはなりません。

「愛は、忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」

わたしたち一人ひとりには、一体何が欠けているのでしょうか。自らの言葉と行いを、振り返ってみたいと思います。

さて教会は本日を、「世界こども助け合いの日」と定めています。以前は「児童福祉の日」と呼ばれ、子どもたちのために何かをしてあげる日のように考えられていました。実際には、この日は、子どもたち自身が使徒職に目覚め、思いやりのある人間に成長することを願って制定されたものです。ですから「助け合い」の名前となりました。今年のテーマは「わかち合うところはたからもの」です。

感染症の影響のもと、世界中の子どもたちもその心と体に大きな影響を受けています。生活環境の劇的な変化によって、心身に不調を来しているこども、経済の悪化によって命の危機に直面するこども。世界に目を向けると、助けを求めるこどもの姿が見えてきます。

生きている神の言葉がともにあることを信じるわたしたちは、将来の世代を担う子どもたちが、互いに助け合い支え合う生き方を選択するよう、ともに神の愛に生きる道を歩んで参りましょう。